國學院大學学術情報リポジトリ

ギラルドゥス・カンブレンシス『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』を読む :「セント・デイヴィズ問題」再論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-21 キーワード (Ja): ギラルドゥス・カンブレンシス, セント・デイヴィズ教会, インノケンティウス三世, カンタベリー大司教ウォルター, 12世後半のウェールズ教会 キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000041

研究ノート

ギラルドゥス・カンブレンシス『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』を読む
ー「セント・デイヴィズ問題」再論

永井　一郎

▶ **要　約**

ギラルドゥス・カンブレンシスは晩年の著作『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』で，自ら提起し，敗北に終わった「セント・デイヴィズ問題」について回顧している。

青年期から彼はセント・デイヴィズ司教となって同教会の栄光を取り戻したいと熱望していた。前司教の死去に伴い1198年に彼は教会参事会によって次期司教候補に推されたが，最終的な決定権を持っていたイングランド王ジョンが彼の任命を拒否したため，大胆な作戦を実行に移した。王権の頭越しにローマ教皇インノケンティウス三世に訴え出て，教皇の権限で自分をセント・デイヴィズ司教に任命してくれるように，また，同教会がかつて持っていた大司教座権を復興してくれるように求めたのである。教皇庁での審議は3年に及んだが，イングランド王権の執拗な妨害，セント・デイヴィズ教会メンバーの内部分裂，教皇自身の政治的な打算が重なって，最終的にギラルドゥスは完全に敗訴した。

著作の中で彼は，「セント・デイヴィズ問題」の経緯を細かく紹介しながら，その時々で自分がどのようなことを考え，また，感じたか記している。この特徴を利用して，本稿は彼の思考や感情の面から上記著作を読み，そこから彼の生涯を振り返ってみた。また，本稿で私のギラルドゥス自身に関する探索を終えることにし，未解決のまま残されている問題を整理した。

▶ **キーワード**

ギラルドゥス・カンブレンシス，セント・デイヴィズ教会，インノケンティウス三世，カンタベリー大司教ウォルター，12世後半のウェールズ教会

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　第1回ローマ訪問ー明るい展望
Ⅲ　第2回ローマ訪問とセント・デイヴィズ教会の「腐敗」
Ⅳ　第3回ローマ訪問ー教皇の変節
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis，本名 Giraldus de Barri，英語表記 Gerald of Wales）は中世ウェールズを代表する聖職の文筆家であるが，彼の名はむしろ「セント・デイヴィズ（St. David's）問題」（以下，「問題」と略記）をローマ教皇インノケンティウス三世に提起し，イングランド王宮と争ったことで知られている(1)。

彼はセント・デイヴィズ教会を代表して次の2点を教皇に訴え出た。

（1）セント・デイヴィズ教会は，司教ピーターの死去（1198年7月）にともない，次期司教候補としてギラルドゥスを王宮に推挙した。しかし，カンタベリー大司教ウォルター（Hubert Walter）は彼を拒否し，自分の側近を含む候補者リストを提出するよう求めた。これは慣行に反する不当な要求である(2)。聖界の頂点に立つ教皇が自らギラルドゥスの推挙を確認し，彼を司教として聖別してほしい。

（2）歴史は，かつてセント・デイヴィズ教会が大司教座であったことを教えてくれる。同教会をカンタベリー大司教の支配下に位置付けているイングランド王権の扱いは，歴史的に見て誤りである。この際，教皇の権限でこの教会の大司教座権を復興し，くわえて，同教会がカンタベリー教会から独立していること，および，ウェールズの主席教会であることを確認してほしい。

いずれの主張も，12世紀初頭以来イングランド王権が築きあげてきたウェールズ聖界支配の仕組みを否定するもので，王権に受け入れる余地はなかった。ギラルドゥスは1180年代後半に王宮付き司祭としてヘンリ二世，リチャード一世に仕えていたから，王宮がどのような判断をするかよく分かっていたが，それでもあえて提訴したのである。

他方，カンタベリー大司教は使者をローマに送ってギラルドゥスの主張に反論し，あらゆる手段を使って王権に有利な裁定を引き出そうとした。

本稿の目的は，ギラルドゥス晩年の著作『セント・デイヴィズ教会の権利と地位（De Jure et Statu Menevensis Ecclesie）(3)』を手掛かりにして「セント・デイヴィズ問題」を跡付けることである。ただし，本稿のサブタイトルから分かるようにこの「問題」を取り上げるのは今回が初めてではなく，大まかな経過は先行拙稿で紹介している(4)。そこで本稿は，1199年の「問題」の提起から1203年の裁定までの間に発生したいろいろな事件を紹介しながら，状況変化に応じて彼が「問題」の当事者であるセント・デイヴィズ教会メンバーとローマ教皇に対する評価をどのように変えていったか探ることにした。なお，もうひとつの当事者であるイングランド王宮，特にカンタベリー大司教を彼は一貫して信頼

のできない論敵とみなしているので，改めて彼の評価を検討する必要はない。

ギラルドゥスは，何か大きな計画を実行する時は必ず後ろ盾となる人々を確保し，連携してことに当たっている。実際，彼が立てた大きな計画とその後ろ盾に注目して彼の生涯を追うことができる。彼のように決して高位とは言えない聖職者にとって後ろ盾は不可欠で，当然のことであるが，彼の特徴は，多くの場合自分よりも高位にある後ろ盾について忌憚のない評価を書き残している点である。以下後ろ盾に注目して彼の生涯を簡単に紹介しよう(5)。

誕生から第1回パリ留学までの時期（1145/46年～1174年）のギラルドゥスは二元的出自，すなわち，アングロ・ノルマン貴族の父，および，アングロ・ノルマン貴族とウェールズ王家の血統を等分に引いていた母を持つという出自を自然に受け入れていた。ただし，彼は父のマノルビエ（Manorbier）城で養育・教育されたから，この時期の後ろ盾はアングロ・ノルマン貴族である親族，さらには彼らの周辺に広がる「ジェラルド一族（Geraldide，英語表記，Geraldins）」であった。

第1回パリ留学を終える時点でギラルドゥスはセント・デイヴィズ教会で活躍することによって司教に昇進するという生涯目標を立て，帰国するとすぐにカンタベリー大司教の支援を受けて南ウェールズの教会改革に着手した。この時期（1174年～1176年）の特徴的な後ろ盾は大司教であり，より日常的な場ではセント・デイヴィズ教会メンバーや「ジェラルド一族」が彼を支えていた。いくつかの後ろ盾を状況に応じて自然に使い分けることができる幸せな時期であった。

1176年に叔父であるセント・デイヴィズ司教デイヴィッド（David）が死去すると，ギラルドゥスは次期司教候補に推挙された。しかし，ウェールズの司教選定権を持つヘンリ二世が彼を拒否し，しかも，ウェールズ王家の血統を持つ者に南ウェールズ聖界最高の地位を与えるのは危険であると考えていることが分かった。

そこで彼は司教となるためには何か特別の作戦が必要であると判断し，第2回パリ留学（1177年～79年）中に，王権のために尽力して王の危惧を払拭するという計画を立てた。帰国後すぐにチャンスは訪れ，王の依頼で当時混乱していたセント・デイヴィズ教会を立て直した。さらに1184年に彼は王宮付き司祭に取り立てられ，以後1189年までヘンリ二世のウェールズ政策を全力で援けている。

この時期の後ろ盾はもっぱら王と王宮の人々であり，南ウェールズの親族は後景に退いている。また，ウェールズ人支配者たちは，彼を王の使者ととらえたから，血縁関係があっても彼を警戒した。

1189年にヘンリ二世はギラルドゥスに報いることなく死去した。彼は乞われてリチャード一世にも仕えたが，司教昇進のめどがつかぬまま1191年に王宮を辞した。作戦失敗

である。

その後8年間，司教ピーターの死去（1198年）まで，彼はセント・デイヴィズ教会で大助祭の職務のかたわら次期司教となる新しい策を練っていた。

この時期の後ろ盾は，彼が目立った活動をしていないためはっきりしない。ただ，彼がセント・デイヴィズ教会の主要メンバーとともに「問題」提起の準備をしていたと推測され，とすれば，彼らが内内の後ろ盾となっていた可能性が高い。

実際，「問題」が提起されるとセント・デイヴィズ教会が彼の後ろ盾としてはっきり姿を現し，間もなくローマ教皇インノケンティウス三世が彼の最も頼りにする存在となった。この時期の状況については次節以降で詳しく紹介する。

以上のようにギラルドゥスは生涯を通じて何度か後ろ盾を変えながら，セント・デイヴィズ司教就任という目標を追い続けているのだが，重要なのは著作の中で彼がその時々の後ろ盾に対して感想や評価を記していることである。『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』も例外ではなく，「問題」の時期にギラルドゥスが持っていた思考を探索するよい手がかりとなる。

「セント・デイヴィズ問題」に関してギラルドゥスは3つの著作を残している。

(1)『論駁（De Invectinibus）[6]』　執筆時期　c. 1200～1206年

(2)『自叙伝（De Rebus a se Gestis）[7]』　c. 1208～1216年

(3)『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』　c. 1216年ないし少し前～1218年

いずれも「問題」終了後にまとめられたものであり，相互に深くかかわっている。

(1) は，「問題」に直接かかわる文書を核として，これにギラルドゥスのコメントを付したもので，文書の収集は「問題」が進行する中で進められ，著作にまとめたのは「問題」以後であると推定されている。

(2) は「問題」終了後に書き始められたもので，第2巻まではタイトルにふさわしくバランスの取れた伝記となっている。それに対して，第3巻の話題は「問題」に集中し，(1) から多くの文書を引用しながら，彼自身の解釈や評価を展開している。また，現存マニュスクリプトは第3巻に大きな欠落があり，その部分は章のタイトルしか伝わっていない。しかし，幸いなことに，ギラルドゥスは欠落部分の一部をそのまま，あるいは，要約して (3) に書き写している[8]。

(3) は，タイトルから判断すると，セント・デイヴィズ教会が古来保持していた特権や地位に関する本のように見えるが，実際は次節以下で紹介するように，ギラルドゥス自身の行動や思考を中心に「問題」の経緯をまとめた著作である。この書は2つの性格を持っている。ひとつは記録であって，「問題」の展開を追いながら，その時々の当事者がどの

ような発言ないし行動をしたか記している。もうひとつは評価であって，彼が裁定後にいわば敗北者として持っていた評価や批判，さらには反省の念が表明されている。

以上から，3つの著作が密接な関係にあること，その中で（3）が本稿にとって最も重要な著作であることは明らかだろう。

当事者よって書かれた記録や評価が複数残されている点で「問題」は史料に恵まれたテーマである。しかし，この史料状況にはやっかいな問題も含まれている。それは史料の筆者が「問題」の結末に対して強い不満を抱いていたという点である。当然，（3）には彼の感情に根差す強いバイアスがかかっている。さらに，彼は強い自負心を持ち，自己を正当化する術を心得ていたから，バイアスをそれとして読み取ることが難しい場合もある。

『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』は2つの序文と本文からなり，本文は7つの部（distinctio）に分かれている。第1の序文は「書簡の序文（Prologus Epistolaris）」と題され，カンタベリー大司教スティーヴン・ラングトン（Stephen Langton）に当てた献呈の辞が中心的内容である(9)。第2の序文は「前書き（Praefactio）」で，一般読者への呼びかけとなっている(10)。ともに通常の序文と大きな違いはなく，本稿に直接関係するのはギラルドゥスがラングトンに向けて，セント・デイヴィズ教会が堕落したのは長年にわたりカンタベリー大司教が同教会の指導を怠ったからだと述べている点だけである(11)。指導を求めるのであれば同教会が大司教の支配下にあると認めているわけで，1218年ころまでに彼が同教会の自立を完全にあきらめていたと読むこともできる。

第1部は，なぜあなたのように優れた人物がセント・デイヴィズ司教になれなかったのかという質問から始まる問答形式をとり(12)，問われたギラルドゥスは「問題」の過程で自分が受けた不当な扱いとそこから引き出される教訓を簡潔に述べている。この著作の意図を読者に伝える場となっていて，第3の序文と考えてもよい。なお，問答形式をとっているのは，ごく少数の例外を除けば第1部のみである。第2部以降は第三者（「大助祭」，「彼」）を主語とする通常の記述になっているが(13)，ギラルドゥス自身の文章であることは言うまでもない。

第2部から第6部までは「問題」の経緯がほぼ時間の流れに沿って詳説され，要所で彼の感想や評価，さらには後日の反省が挿入されている。本稿にとって最も重要な部分であり，その内容は以下第2節から第4節で紹介する。

第7部は，セント・デイヴィズ教会の参事会はなぜ優れた人物ギラルドゥスを最終的に排除したのかという問いかけから始まり，「あわれなセント・デイヴィズ教会メンバー」が厳しく断罪されている(14)。

この著作の現存マニュスクリプトで重要なものは次の2点である(15)。

（1）British Library，M. S. Cotton，Dom. Vitell. E v　　13世紀

（2）Cambridge Univ., Corpus Christ College, 400　　13世紀

古いマニュスクリプトが2点残されているが，本稿が利用するのは（1）のみである。それは（2）は基本的に（1）を要約したダイジェスト版だからである。ただし，（2）もギラルドゥス自身が要約したものと推定されているので，彼がどのような目的で要約したのが分かれば重要な意味を持つ可能性がある。このほかに16世紀につくられた（1）からの抜粋と，同じく16世紀に書かれた（2）の写本が残されている[16]。

なお，（1）はスティーヴン・ラングトンに贈られた写本ではなく，その意味でオリジナルではない。しかし，13世紀の写本であること，また，ギラルドゥスが自分用のコピーを別に作らせる習慣を持っていたことから判断して[17]，まずはオリジナルの内容をそのまま伝えていると考えてよいだろう。

現在使われている校訂本はブリュワー（J. S. Brewer）によるもので，（1）を底本としている[18]。

『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』にはバトラー（H. E. Butler）の英訳がある[19]。本稿もこの英訳を利用しているが，通常の訳本とは違った特徴を持っているので注意が必要である。

第1に，バトラーの英訳は『ジェラルド・オヴ・ウェールズの自叙伝（The Autobiography of Gerald of Wales)』の中に組み込まれている。タイトルだけで判断すると，ギラルドゥス自身による『自叙伝』の英訳であって『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』とは無関係に見えるが，そうではない。バトラーの意図は，多くの著作に散在するギラルドゥスの記述を英訳引用することで，独自の，いわばバトラー版のギラルドゥス自伝を作り上げることにあった。具体的には，ギラルドゥスが自分の活動を記している文章を6つの著作から抜き出したうえで，それぞれの年代を推定し，順に配列するという方法をとった[20]。ただし，抜き出された文章の大部分は『自叙伝』と『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』からのもので，他の4著作からの引用は少数にとどまっている。

第2に，バトラーの英訳はかなり偏ったギラルドゥス伝となっている。すなわち，最初の三分の一で「問題」提起以前の50年余りが語られ，残り三分の二が5年間の「問題」に当てられている。分量でいえば，自伝というよりも「問題」に関する書だといってもよい。ただし，この偏りはギラルドゥスが「問題」に関して特に多く記述している結果であって，バトラーの責任ではない。

第3に，バトラーは『自叙伝』の現存部分はすべて訳出しているが，『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』では「問題」と無関係な記述を省略したり，要約で済ませている。ただし，ブリュワーの校本と照合してみると，省略個所はいずれも本稿にとってまずは関係のない記述であることが分かる。手がかりとしてバトラーの英訳を使っても大きな問題

はない。

準備作業の最後に，本稿が先行する拙稿どのようにかかわっているか簡単に記しておこう。まず「問題」を主題としている点で，本稿は「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題[21]」を補足する役割を担っている。次にギラルドゥスの思考や政治的スタンスを探求するという目的でいえば，「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性[22]」，「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図を手掛かりに[23]」，「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス[24]」，「『君主の訓育』第１巻を読む－1190年代前半のギラルドゥス・カンブレンシス[25]」，「ギラルドゥス・カンブレンシスと『大司教座セント・デイヴィズ教会』[26]」につながる。

Ⅱ　第１回ローマ訪問－明るい展望

「セント・デイヴィズ問題」は司教ピーターの死去（1198年７月）から始まる。ただし，ギラルドゥスが「問題」を着想したのは数年前で，その後教会の一部メンバーとともに計画を練り上げてきていたと考えてよい。時間がかかったのは，「問題」の構想に司教選定をめぐる主張が含まれていたため，ピーターの存命中は提起できなかったからである。

教会メンバーは司教死去の情報を直ちにギラルドゥスに送り，同時に教会全体の意志として，彼がフランス滞在中のリチャード一世のもとへ行き，事前承認を得て司教の位置を確保するよう要請した。彼を唯一の司教候補に推すという合意がすでにできていたのであろう[27]。

要請を受けてギラルドゥスはフランスへ出発したが，旅の途中で王急死（1199年５月）の情報を得て，面談先を次王と目されたジョンに変えた。ジョンはギラルドゥスと教会の願いを好意的に受け止めたが，正式の司教任命は即位後にすると告げた。ギラルドゥスの司教就任はほぼ確実と思われるような状況である。

しかし，ジョンの返答を知ったギラルドゥスと教会は，ジョンの即位を待たず，翌６月にイングランド王宮を飛び越えてローマ教皇に「問題」を提起する決意を固めている。これは，ジョン個人は好意的でも，司教聖別権を持つカンタベリー大司教ウォルターがかねてよりギラルドゥスに敵意を示していて，強く反対すると予測したからであろう[28]。もしこの推測が当たっているならば，王への請願もひとつの手続きにすぎず，教皇への提訴は既定路線だったことになる。

1199年8月にギラルドゥスはローマへ出発した。ローマ到着後彼がどのように教皇インノケンティウス三世に接触したのかわからないが，用意してきた要請，すなわち，自分をセント・デイヴィズ司教として聖別すること，および，同教会の大司教座権を確認ないし復活することを直接教皇に訴えたことは間違いない。

教皇は，ギラルドゥスと対立するカンタベリー大司教の主張も聞こうとしてその使者の到着を待ち，1200年1月に第1回審議会を開いた。審議が始まると，ギラルドゥスと大司教の使者がそれぞれの主張を述べ，さらに相手方に反論した。続けて教皇から裁定は次回以降に下すこととし，その前に双方の主張がどのような事実に基づいているのか調査するという意向が示された。調査は大司教側からも要請され，これで第1回審査は終了した。

ギラルドゥスは大司教側の主張が自分への中傷を含み，多くは事実に反すると非難しているが，審議が軌道に乗ったこと，また，事実調査が行われることに安堵したであろう。セント・デイヴィズ教会が一致して彼を司教候補としたことは間違いのない事実だったからである。

他方，大司教の行動を見ると，敵対者の記述という点を割り引いても，いくつか疑問が生じる。例えば，大司教はギラルドゥスをひどく中傷する手紙を教皇に送っているが，これは何を狙った作戦か。ギラルドゥスが司教にふさわしくない人物だと印象付けようとしたのだろうか。また，事実がそのまま明らかになれば自分に不利となることを承知しながらあえて調査を要請したのはなぜか。調査が始まるまでに王国，特にセント・デイヴィズ教会で自分の主張に即した証言者を用意できる，そうすれば教皇がギラルドゥスに有利な裁定を下すのを阻止できる，と考えたからだろうか。

私の疑問はともかく，重要なのは双方の主張を教皇がどのように受け止めたかである。教皇は大司教よりもギラルドゥスの主張に興味を持ったようで，特別の配慮を示している。

大司教座権についていえば，ギラルドゥスの求めに応じて教皇庁文書館でセント・デイヴィズ教会の位置づけに関する文献探索を許可し，同教会が必ずしもカンタベリー大司教の配下に位置付けられていないことを自ら確認している(29)。

教皇の好意的な対応は，非公式のものではあっても，ギラルドゥスに大きな希望をもたらした。この点を示す記述をひとつ紹介しよう。ギラルドゥスは教皇が私的な会話の中で次のように述べたと記している。発言がそのまま書き写されているとは考え難いが，同趣旨の発言があったと判断してよい。

> (2−1) ギラルドゥスの話を聞いた教皇は次のように言った。「もし［あなたの］言うことが立証できるなら，［それであなたが］求めている［セント・デイヴィズ教会の大司教座］権を確保するのに充分である。」この教会の諸権利を明示するすべての証拠を書き記し，提出してほしい(30)。

先行拙稿で紹介したように，「問題」提起に際してギラルドゥスが用意した論理は以下の４点であり，充分な証拠とは言えなかった。①セント・デイヴィズ教会は聖デイヴィッド（David）以来大司教座であった。②大司教サムソン（Samson）が疫病を避けてブルターニュに渡ったため，教会は形式上大司教座ではなくなった。③しかし，教会はその後も実質的に大司教座としての権威を保持し，現在も南ウェールズの聖界をリードしている。④この際，教皇の権威によってセント・デイヴィズ教会を正式に大司教座と確認し，古来の権利と地位を復興してほしい(31)。

ギラルドゥスはこの論理がイングランド王宮に通用しないことを知っていたから，「問題」提起の成否は教皇の受け止め方にかかると考えていた。そうした不安を抱えている時に上記の教皇の発言を引き出せたのであるから，彼は大いに喜んだはずである。実際彼は，教皇の求めに応じてセント・デイヴィズ教会を中心としたウェールズのキリスト教史をまとめ，第２回審議会に提出している(32)。

もうひとつの主張であるギラルドゥスの司教就任についても教皇は好意的な姿勢を示している。まず，教皇は私的な会話の中で，大司教側の主張に対する彼の反論を正当なものと認め，さらに次のような発言をしている。

（2－2）第１回審議の終わると，教皇はギラルドゥスに向かって，もう少し判断材料が集まるまで待つように言い，材料が集まれば「何らかの手続きが取られることは間違いない。」と述べた。「これを聞いた人々はみな，大助祭［ギラルドゥス］がすぐに昇進するだろうと考えた(33)。」

ここでギラルドゥスは教皇周辺の人々の心中を推測しているだけで，言葉で確認しているわけではない。しかし，こうした推測を可能にする何らかの言動があったことはまず間違いない。彼は教皇だけでなく周囲の人々の反応も注目していた。

（2－3）教皇はギラルドゥスの司教就任について周囲の人々と非公式に検討し，その際教皇が述べたことが彼の友人であった枢機卿からひそかに伝えられた。教皇は，現在セント・デイヴィズ教会で行われた司教候補選出について議論されているが，それとは別に，「［ウェールズのように］野蛮で，［対立する勢力間の］敵意に満ちた国ではよい統治が求められているのだから，ギラルドゥスに独自の賜物としてマニュウ［＝セント・デイヴィズ］教会を与える」のがよいと考える，と洩らしたというのである(34)。

ここから３つ重要な情報を引き出すことができる。①教皇は自分の権限でセント・デイヴィズ司教を任命する意図を持っていた。②ウェールズでイングランド王権とウェールズ人勢力とが対峙し，政治的混乱がしばしば発生していることを知っていた。③そうした国を統治するために必要な資質をギラルドゥスが備えていると判断していた。

いずれも「問題」提起する際にギラルドゥスが持っていた理解と合致しており，これで教皇は自分の後ろ盾になってくれると彼が確信しておかしくない発言である。彼は作戦成功と判断し，これで明るい展望が開けたと感じたであろう。

教皇がギラルドゥスの主張や能力を高く評価している情報はイングランド王宮にも伝わったようで，巻き返しをはかるため，大司教は教皇庁の主要メンバーに金品を贈り，味方につける工作を開始した[35]。

（2－4）「大司教から教皇庁に利益が供与された結果」，教皇はイングランド王の感情を害するような行動をとることができなくなった。「こうして教皇の政策が変更されたのである[36]。」

ただし，買収工作は秘密裏に行われたはずで，この点を踏まえると（2－4）は第1回ローマ滞在中に気づいたことではなく，後に彼が「問題」の経緯を振り返った時に思い当たったものである可能性が高い。実際，ギラルドゥスはこれに続く記述の中で自分が買収工作に対してどのような対応をしたのかまったく触れず，不安どころか，大きな希望を持たせる出来事ばかり紹介している。ひとつ事例を挙げよう。

第1回審議が終わった後もギラルドゥスはしばらくローマにとどまり，次の審査に必要な情報を集めていたようで，その時の出来事である。彼が私的な会話の中で教皇にセント・デイヴィズ教会の大司教座権についても充分調査をしてほしいと願い出たところ，教皇から先例のない権利主張を審議するのは手間がかかるので，これまでに同様な要請が出されていないか調べるようにと助言された。彼は司教バーナード（Bernard）の要請と交渉を知っていたから勇んで教皇庁文書館を探索し，バーナードが教皇に送った正式の要請書を発見した[37]。彼がその文書をもって教皇庁の人々の前へ進み出た時に，次のような場面が展開した。

（2－5）ギラルドゥスがこの文書を手にして教皇に近づくと，教皇は彼を「大司教」と呼んで挨拶した。彼は「大助祭」と呼びかけられたのを聞き間違えたのかと思ったが，周囲の人々の様子から「大司教」と呼ばれたことを確認した。そこで「ギラルドゥスは教皇の前に慎ましく身を投げて，足に口づけし，「これまで［の事績から］，神と教皇の恩寵によってそれ［＝教皇の言葉］が真の予言となることを［私は知っています］。［今回も］またそうなるように［願っています］。］と述べた。彼が持参した文書を読み上げると，教皇はその内容に満足した[38]。

ギラルドゥスが大司教に就任できれば，彼と教会が提出した2つの要請が同時にかなえられることになる。彼が教皇の裁定に大きな期待をかけるのも当然と思われる状況である。

以上かわかるように，第1回ローマ訪問はギラルドゥスにとって予想以上に明るい展望をもたらした。彼は教皇の信頼と好意を獲得しており，自分の主張に沿った裁定を得る準

備も充分に整えることができた。

さらに教皇は，セント・デイヴィズ教会の業務が滞るのを心配してであろう，ローマを去るギラルドゥスに教会の管理を委ねている[39]。これは教皇の内心での裁定を示唆していると理解できるが，それだけではなく，次節で紹介するように，その後の彼の活動を支える重要な権限となった。

1200年夏にギラルドゥスはローマを離れ，セント・デイヴィズ教会へ戻った。明記されていないが，彼はローマで得た成果を教会メンバーに報告したはずである。報告の内容を推測すれば，①新司教選出までの間，自分が教会を管理するよう教皇から命じられたこと，②自分が司教候補に選出された経過が教皇の使節によって調査され，その結果を踏まえて次期司教について裁定が下されること，③自分が教会の大司教座権を間接的に支持する文書を教皇庁で発見し，また，司教バーナードによる大司教座権要請の正式文書も確認したこと，であろう。

これら3点を今後のこととして読み替えれば，教皇に依頼を受けて自分がリーダーシップをとるので協力してほしい，そうすれば必ず教会の2つの要請は実現するという自信に満ちた報告ないし宣言になる。教会メンバーにとって大きな朗報となるはずであった。

しかし，彼は報告が教会で歓迎されたことを示す記述をまったく残していない。それは，彼の留守中に，カンタベリー大司教の働きかけによって教会メンバーのスタンスが大きく変わっていたからである。ギラルドゥスの不在中に教会で何が起きていたのか，少し説明しよう。

まず，大司教はジョン王を説得して，ギラルドゥスを司教に任命する意思はないと言明させた。次に，セント・ドグマイル（St. Dogmael）修道院長ウォルター（Walter）とウイットランド（Whitland）修道院長ピーター（Peter）を，それぞれ別の場所でセント・デイヴィズ司教に任命するという約束をして味方に引き入れ，彼らに指示して教会内に反ギラルドゥス派をつくらせた。両者とも教会の主要メンバーであり，司教候補となる資格を持っていたが，推挙されていなかった。そこに大司教は眼をつけたのであろう。

そのうえで大司教はウォルターを正式候補と決め，しかも，その推挙はギラルドゥスよりも先に行われたという筋書きを作って教会に押し付けた[40]。これは明らかに虚偽であり，ヘンリ一世以来の慣行に反する行為だった。

冷静な書き方をしているが，大司教の工作を知ってギラルドゥスが怒りを感じたことは間違いない。予想していたこととはいえ，強大な敵がはっきり姿を現したのである。「問題」がローマで感じていたよりもはるかに難しくなることは明らかだった。

Ⅲ　第2回ローマ訪問とセント・デイヴィズ教会の「腐敗」

1201年春に教皇の第2回審議が行われた。今回もカンタベリー大司教は出席せず，代理人の派遣ですませている。

ここで大司教側は新しい主張を持ち出した。セント・デイヴィズ教会が正式に司教候補としたのはギラルドゥスではなく，セント・ドグマイル修道院長ウォルターであり，大司教もこれを受け入れているというのである。しかし，ギラルドゥスの反論を受ける中で，ウォルターが候補に推挙されたとする時期は，ギラルドゥスが第1回訪問でローマに到着した後であることが判明し，この件に関する審議は停止された。

他方，ギラルドゥスはセント・デイヴィズ教会に残されていた司教バーナードの文書を教皇に提出し，大司教座権復活の要請に先例があることを立証した(41)。

しかし，教皇は今回も実質審議に入ることなく閉会を宣言した。大司教が欠席のままでこれ以上審議できないというのである。予想外の閉会となった理由は2つあったと考えられる。ひとつは次期司教選出に関する事実調査はまだ行われていなかったからで，前回決めた調査の上裁定するという手続きに入ることはできなかった。もうひとつは大司教の欠席である。教皇は前回終了時に以後大司教が自ら出席するよう求めており，今回は大司教座権について審議する予定であったと考えられる。しかし，大司教は欠席しただけでなく，代理人に大司教座権について発言する権限を与えていなかったから，教皇も審議を先延ばしするほかなかった。

大司教側としては大司教座権が審議されること自体避けたかったと推測され，代理人に権限を付与しなかったのも作戦の内であった可能性が高い。

他方ギラルドゥスは自分の調査結果を生かして大司教座権について審議をしてほしいと願い出たが，受け入れられなかった(42)。彼は国内，特にセント・デイヴィズ教会が自分にとって不利な状況になっていることを憂慮していたから，教皇の判断はおそらく予想外のことであり，焦りを感じ始めたのではなかろうか。

実際この年夏にギラルドゥスが帰国すると，セント・デイヴィズ教会の「腐敗」はさらにひどくなっていた。教会の主要メンバーの態度が変わり，大司教の意を受けて動くフォリオット（Foliot）やオズバート（Osbert）の発言力が強くなっていた。大司教派が教会を掌握する中で，ギラルドゥスの支持を取りやめると明言する者も出てきた(43)。この動きを阻止できなければ，彼は「問題」提起の際に掲げた論拠，教会の一致した支持が崩れてしまう。

帰国してギラルドゥスがまず着手したのは，ウェールズ北部，東部で勢力を持っていたウェールズ人支配者たちを訪問して支援を求めることであった。彼が後に漏らしている不満から判断して，要請は資金援助であったと推定される(44)。教会内の財政がフォリオットらに握られて，彼は利用できなくなっていたのかもしれない。

ギラルドゥスによれば，北部，東部のウェールズ人支配者たちは彼を温かく迎え入れ，支援を約束したという。おそらく彼は，セント・デイヴィズ教会は古来ウェールズ人全体を守護する主席教会であり，現在でもイングランド勢力の進出を抑える大きな手掛かりになると説いたのであろう。『自叙伝』には次のように記されている。

（3－1）ギラルドゥスがグウィネッズ（Gwynedd）の君主サウェリン・アブ・イオルウェルス（Llywelyn ab Iorwerth）を訪ねて支援を求めると，サウェリンは王宮に家臣を招集して，ギラルドゥスを支援すべきかどうか問うた。参集者たちが答えかねて発言しないのを見て，サウェリンは次のように自分の考えを述べた。「私は，［司教］候補［ギラルドゥス］が［「問題」について］諦めて沈黙することなく，強大な敵であるイングランド［王権］に異議を唱えて，セント・デイヴィズ［教会］の［大司教座］権を立証しようとしていることは，たとえ彼が勝利を得ることができなくても，・・・・大きな価値があり，賞賛すべきことだと考える」，と(45)。

ギラルドゥスはこれまで北ウェールズの支配者に王の使者として面談することはあっても，支援を求めることはなかった。今回はそれだけ彼が追い詰められていたのであろう。他方，サウェリンにとっては少しでも勢力保持に役立つ人物を味方にしておくのが得策であったから，ギラルドゥスの主張ないし論理をまずはそのまま受け入れたのであろう。ただし，この後の動きを見ると実質的な支援はなされなかったようで，サウェリンは王権と直接対立してまでギラルドゥスを守る意思をもっていなかった可能性が高い。

1202年1月にギラルドゥスは，教皇から与えられた権限を使って，セント・デイヴィズ教会の全メンバーを招集した。そこで彼は，参集者に「問題」をともに提起した時の目的を思い出し，計画を遂行しようと訴えた(46)。具体的に言えば，教皇の使節によって開かれる審問会で，自分たちが確かにギラルドゥスを唯一の司教候補に推したと証言するよう求めたのである。このような念押しをしたのは，彼らが事実に反する証言をする危険性があると考えていたからであろう。

また，自分の説得だけでは不充分と考えたのか，ギラルドゥスはウェールズ人支配者たちの手紙を読み上げている。手紙には，ギラルドゥスを支援しないものは敵とみなす，彼の支援で教会が損失を被ったならばこれを補填する用意がある，支援したために教会から追放された者はかくまう，といった約束が書かれていたという(47)。ただし，約束を信じて証言したメンバーは，彼の記述を見る限り，いなかったようである。むしろこの手紙に

関する記述は彼の危機感の表れと理解するのがよいであろう。

同年3月にギラルドゥスは，フォリオットとオズベルトを破門した。2人が教皇から自分に委ねられた権限を無視し，命令に従わなかったからである。くわえて，彼は全教会メンバーに自分への忠誠を誓うよう求めている(48)。こうした手続きが効力を持たなかったことは，その後の経過から明らかであり，おそらく彼自身にも分かっていたと思われる。しかし，教皇の権威をかざす以外に教会をリードする方法はなくなっていたのである。

この時期の教会メンバーについてギラルドゥスは次のように記している。年長のメンバーは本心では自分を支持しているのだが，大司教の圧力でそれを表明できなくなっている。若いメンバーの多くは大司教の誘いを進んで受け入れ，自分に敵対する態度を隠さない，と(49)。教会の内部が分裂し，しかも，外から見た教会のスタンスと内心のそれとの間にずれがあった。彼のメンバーに対する協力要請はこうした状況のもとで行われたのである。

1202年1月から教皇の約束した審問会が王国各地で開かれた。教皇は審議をエリー司教ロンシャン（William Longchamp）に委ねた。彼は王国内の地位でいえばカンタベリー大司教の配下にいたから，事実確認が目的とは言え，審問会はギラルドゥスにとって安心できる場ではなかった。

第1回審問会はウースターで開かれることになっており，ギラルドゥスを含む教会の主要メンバーが全員赴いた。しかし，肝心のロンシャンが所用でフランスへ渡り，出席できなかったため流会となった(50)。次に予定されていたニューポートの審問会も同様の理由で流れ(51)，7月にブラックリーで開かれた第3回審問会で本格的な審議が始まった(52)。

審問が始まると，ギラルドゥスと他のメンバーの主張は予想通り真っ向から対立した。彼は自分が正式に選ばれた唯一の司教候補であると主張し，他のメンバーはギラルドゥスを候補に選出したことはなく，ウォルターが最初の正式候補であると主張した(53)。大司教が主要メンバーをほぼ完全に抱き込んでいたのである。ギラルドゥスの孤立状態があらわになった。

ロンシャンは王宮の主要メンバーであったから，この間の事情をよく知っていた可能性が高い。とすれば，彼の任務は単なる事実の調査・確認ではなく，2つの主張を教皇と大司教の意向に合わせて調整することであった。当然審議は慎重かつ微妙なものにならざるを得ない。例えば，審議の最後にロンシャンはギラルドゥスに向かって次のように問いかけているが，ここには審問者としての配慮ないし苦慮が表れている。

(3－2)「エリー司教が［ギラルドゥスに対して］，なぜ多くの犠牲を払ってこのまったく恩知らずな人々の利益を図ろうとするのか，［彼らは］ギラルドゥスが差し出している利益を受け取ろうとせず，奴隷状態，服従状態からの解放を望んでいない［ではないか］と問いかけた時に」ギラルドゥスは人々の前で次のように述べた。「私は

この奴隷たちを解放すること，また，この囚人たちを，彼らが望んでいなくても，牢獄から解放することができる」と信じている，と[54]。

この時点でギラルドゥスは，教皇に提出されるロンシャンの報告が自分の期待とは違うものになることを理解したであろう。ローマ滞在中の彼は，事実を調査すれば自分が唯一の司教候補に推されたことが確認され，そう教皇に報告されると楽観していたが，ロンシャンの問いかけは複雑な含みを持ち，逆の報告すら予測させる。

しかし，ギラルドゥスはあきらめなかった。ロンシャンの報告が自分の主張を完全に否定できないことも確実で，最終的に教皇の判断に持ち込まれる，とすれば，これまで自分を信頼し，好意すら見せている教皇が正しい裁定を下してくれる，と判断したのであろう。結果を知る者が読むと，(3－2) の最後の文章は単なる虚勢にも見えるが，彼はまだ希望を失っていなかった。それは，次の審問会のあと彼が大司教側の妨害を受けながら苦労してローマへ向かい，教皇の第3回審議に出席していることからも分かる。彼はまだ教皇を信頼していた。

他方，ギラルドゥスのセント・デイヴィズ教会メンバーに対する信頼は彼らの証言によって決定的に失われた。(3－2) のすぐ後に記されている文章を引用しよう。

(3－3)「セント・デイヴィズ教会のメンバーがなぜこれほど堕落したのか，不思議なほどである。実際，［教会には］ウェールズ人参事会員もいて，かつて彼ら［ウェールズ人］が古来の名誉と自由を享受していた［ことを知っているにもかかわらず］，これは彼ら全体に見られることだが，現在彼らを抑え込んでいる隷属や服従から引き離されるのを拒否しているのである。その救済が外部の人々によって提供される場合であっても[55]。」

この文章をどう理解するか，私の考えを述べておこう。

第1に注目したいのは，「外部の人々」という語句である。文脈から判断してこれがギラルドゥス自身を指すか，彼を含んでいることは間違いない。とすれば，彼は非ウェールズ人として，具体的には南ウェールズの征服者，アングロ・ノルマン貴族の一員として「問題」を提起しているのであり，そのためにウェールズ人の高位聖職者や世俗支配者と連携していたことになる。彼の真の狙いは，自分がリーダーとなってセント・デイヴィズ教会の栄光を取り戻すことにあり[56]，実現すれば付随的にウェールズ人にとっても利益をもたらすと考えていたのであって，ウェールズ人独自のものとして同教会をイングランド王権から取り戻すことではなかった。教会の栄光回復のためには，自分のような文明化された「外部の」優れたリーダーが不可欠であると信じていた。

第2に，ブラックリーの審問会でギラルドゥスのウェールズ人評価は大きく変化している。頼りとする仲間ないし後ろ盾から憐れむべき存在へと没落している。なぜこのような

変化が生じたのか。まず彼は，自分がこれだけ努力を重ね，導いてきたにもかかわらず，ウェールズ人聖職者たちは公の場でその宿願である大司教座権の要求を放棄し，しかも，リーダーである自分に反旗をひるがえしたのは忘恩行為であると考えた。次に，ここまで自分が無視されるのならば自ら絶縁するほかないと決断し，「問題」のためにともに戦う仲間であるというウェールズ人の位置づけを捨てた。そこで，彼が以前から持っていたウェールズ人・社会に対する認識が浮上し，その結果彼は急にウェールズ人・社会の評価を変えた，あるいは，変えたように見える。以上のように私は推測している。

ただし，以上の推測から逆にひとつ疑問が生まれる。それはウェールズ人をいわば見下していたギラルドゥスが生涯をかけた「問題」提起に際してなぜセント・デイヴィズ教会の，さらには，ウェールズ全域のウェールズ人支配者たちに期待をかけたのか，なぜ奴隷根性を持ち，信頼できないと知っていた人々と連携しようとしたのかという疑問である。この点について私はまだ答えを見つけていない。

エリー司教による審問会はその後9月にセント・オーバンズで開かれたが，新しい事実は発見されなかった(57)。そこでロンシャンはいずれの主張が正しいか判定せず，両論併記で教皇に報告した。これを見てギラルドゥスは，ロンシャンは真実を知っていたが，カンタベリー大司教に気兼ねして自分の判断を下せなかったのだろうと推定している(58)。その通りであろう。

追い打ちをかけるように，大司教は王を説得して，ギラルドゥスは「イングランド王とその王国に対する公の敵」であると宣言させた(59)。その結果ギラルドゥスにとって故郷南ウェールズですら安全な場所ではなくなり，旅行中に宿泊を断られるなどこれまでにない苦労を強いられた。彼は各地に心通じる人々を持っていたが，その友人ですら彼を表立って支援するのを躊躇するほどになった。王国内で彼は孤立させられたのである。

1202年9月か10月に彼はウェールズを離れ，いろいろな事故や妨害に悩まされながら冬前にローマに到着した。

Ⅳ　第3回ローマ訪問ー教皇の変節

1202年秋に教皇の第3回審議が始まった。教皇はここで，セント・デイヴィズ司教候補選出の問題について裁定を下すと予告していた。なお，同教会の大司教座権については，前回の審議でカンタベリー大司教の出席が不可欠とする教皇の判断が示されてにもかかわらず，今回も大司教は代理人を送っただけだったので，審議の対象とはならなかった。

開会直後にギラルドゥスと大司教の代理人はそれぞれ前回以降の動きを取り上げて，相手を非難した。ギラルドゥスが教皇に訴えたのは，この間彼がイングランドやウェールズで体験したこと，すなわち，大司教がセント・デイヴィズ教会を分裂させ，その主要メンバーに対して事実とは異なる証言を強要しているという点である(60)。ただし，彼が何よりも訴えたかったのは，大司教側が繰り返している司教候補選出の説明をうのみにせず，事実に即して正しい裁定を下してほしいということであっただろう。

他方，大司教の代理人はギラルドゥスがフォリオットやオズベルトを破門したことを取り上げ，これは職権乱用であると訴えた。教皇のギラルドゥスに対する好意が低下することを狙ったのかもしれない。しかし，教皇は，新司教選出まで同教会の管理はギラルドゥスに委ねてあるとして，訴えを取り上げなかった。

ギラルドゥスによれば，列席していた枢機卿たちは彼に有利な裁定を確信したという(61)。ただし，これは枢機卿たちに表情や態度から下した彼自身の希望的観測と考える方がよい。

本題に入ると大司教の代理人は，セント・デイヴィズ教会はギラルドゥスを司教候補に選んだことはないと主張した(62)。第２回審議ではギラルドゥスとは別の候補ウォルターを挙げて失敗したことを受けて，今回はギラルドゥスの選出自体を否定する作戦をとったのである。この偽りの申し立てを支持する証人も用意されていたと思われる。大司教はイングランド王の権益を守るために手段を択ばなかった。

ギラルドゥスは当然これに反論し，ウェールズに使者を送って自分が確かに司教候補になったことを確認してほしいと願い出た。しかし，教皇はこれを受け入れなかった。彼が相談した枢機卿たちも同意見で，教皇はこれまでの調査で決着をつける意思を固めており，ギラルドゥスに有利な判断を下すことは間違いないから延期は得策ではないと助言した(63)。そこで彼は不満を抑えて，再調査の要請を取り下げた。

この時の状況を彼は次のように記している。

> (4－1)「そして，大助祭［ギラルドゥス］はまだ［教皇庁で］進められていた［大司教の］腐敗工作について何も知らず，［教皇を］信じすぎていたので」，まっすぐに教皇に歩み寄り，教皇が自分にこれまで多くの恩恵を与えてくれたこと，審議の場で助言者となってくれたことを感謝し，改めて自分の信念を述べた。・・・・・これに対して教皇は，ここでもう決着をつけたほうがよい，「私はお前の正当な権利を損なうようなことを望んでいないから，恐れる必要はない」と述べた(64)。

これを聞いて彼は不安を抱きながらも教皇の裁定に期待をかけたと思われる。

しかし，続いて下された教皇の裁定は彼の期待を裏切るものであった。教皇は，ギラルドゥス，ウォルター双方の司教候補選出を無効とし，候補選出をやり直すよう命じたので

ある。

後になって彼はこの時の自分を責めて次のように記している。

(4−2)［自分］ギラルドゥスはこうして不運にも［教皇によって］説得され，［教皇］庁の「人々の」あてにならない誠実さを信頼しすぎていた[65]。

裁定の内容は3点にまとめることができる[66]。

(1) ブレコン大助祭であるギラルドゥスは自分がセント・デイヴィズ教会の総意で次期司教候補に推挙されたと主張し，カンタベリー大司教ウォルターはセント・ドグマイル修道院長ウォルターが正当な司教候補であると主張している。

(2) 大司教の主張によれば，先の司教ピーターの死後セント・デイヴィズ教会参事会がウォルターを推挙し，王宮に手紙を送って司教選定手続きを進めるよう要請した。しかし，この時王リチャード一世が在仏中だったため，この手続きは大司教に委ねられた。その後大司教は渡仏して王の承諾を得たうえでウォルターを次期司教に任命した，という。

しかし，参事会が使者に託した手紙には大司教に司教選定の手続きをすべて委ねるとは記されていない。したがって，ウォルターの司教選定は手続き上問題があり，直ちに認めることはできない。

(3) ギラルドゥスの主張によれば，先任司教の死後すぐにセント・デイヴィズ教会参事会で彼が唯一の司教候補とされ，教皇に伝えられた，という。しかし，大司教によるウォルター選定が完全に無効かどうか確認できない状況であること考えると，ここで直ちにギラルドゥスの主張に従うことはできない。

見られるとおり教皇の裁定は難解であり，私の読み取りに大きな間違いがないとして，論理が通っていない。両者の主張をともに却下するために無理な理屈をひねり出したように見える。

ギラルドゥスも同様に考えたようで，「教皇はこうした言葉で自分自身の行動を言いつくろったのである」と述べている[67]。彼は裁定を聞いた時にどのように感じたか記していないが，この言葉にはいろいろな思いが込められているのであろう。

それはともかく，ギラルドゥスにとっても本稿とっても重要なのは，この裁定で彼がどのような状況に置かれたかである。彼は王国内での安全が保障されなくなっていて，教皇の裁定にすべてをかけていたから，これは深刻な問題であった。

教皇は司教候補を改めて選出するよう命じただけであって，ギラルドゥスを排除したわけではない。したがって，論理だけでいえば，彼が再度推挙され，司教になる可能性はある。しかし，上で紹介したセント・デイヴィズ教会の状況を踏まえると，現実問題としてその可能性はなくなっていた。教会内には内心で彼を支持する者がいたが，公言すること

はできなかった。彼が司教になる可能性は教皇の裁定でなくなったと考えてよい。大司教の使者たちも同様に判断したのであろう，裁定を聞くと，その場で喜び合ったと記されている(68)。

ギラルドゥスは裁定を聞きながら，自分の生涯をかけた夢がついえたと分かったはずである。しかし，彼は教皇に異議申し立てをしなかった。裁定は表面上双方の主張を対等に扱っていて，セント・デイヴィズ教会の「腐敗」を無視すれば彼にもチャンスがあると言い抜けできる論理になっていたので，反論しにくかったのだろうか，それとも，教皇の裁定は内容いかんにかかわらず受け止めると決めていたのだろうか。いずれにせよ彼は納得していないまま裁定を受け入れた。

彼は教皇の言葉に騙されたといってもよいわけで，不満を持って当然であろう。しかし，この段階になっても彼の非難は教皇よりむしろ大司教に向けている。

> (4－3)「教皇がこの裁定のすべてを，狡猾な相手方［＝大司教］がたくらんだ偽りに基づいて作り上げた」ことは明らかである。・・・・・「彼ら［＝大司教側］の証言には一片の真実もなく，［すべて］嘘で固められていたにもかかわらず(69)。」

このほかにも大司教やその配下で活動したフォリオットなどに対する罵倒は何度も出てくるが，教皇を直接糾弾する記述はない。

ただし，彼は教皇に対してひとつ要請を行っている。上述のように「問題」を構成する2つの主張の内でセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する問題は，大司教が審議の場に姿を見せなかったため，まだ正式に取り上げられていなかった。次期司教候補の選出について決着がついたのだから，第2の主張を取り上げてほしいと願い出たのである。彼は教皇が個人的に示した関心に賭けてみようと考えたのであろう。

教皇はこの要請をまずは受け入れ，ひとつ条件を出した。すなわち，もしセント・デイヴィズ教会参事会が，自分たちは当初大司教座権についてギラルドゥスに賛同していたが，大司教から脅かされたため彼を見捨てることになったと証明できれば審議する，というのである。くわえて，教皇は事実調査のために王国へ使節を派遣する場合，その責任者を，カンタベリー大司教区ではなく，ヨーク大司教区の人材に委ねると述べた。この人選方法は，カンタベリー大司教の圧力を避け，第三者の判断を得られる点でギラルドゥスにとって有利に見える。

この話を聞いてローマに滞在していた大司教の使者たちは狼狽したとギラルドゥスは記している。大司教にとって次期司教の問題以上に重要だったのは，セント・デイヴィズ教会が大司教座になることであり，もしこれを阻止できなければ大司教は許さないと知っていたからである(70)。

他方，ギラルドゥスはこの教皇の提案にほとんど興味を示していない。調査の方法以前

に肝心の参事会が今や大司教の意のままになっていて，大司教座権の復活を可能にするような証言をする見込みがほとんどなかったからである。彼が教皇の提案に賭ける気持ちを失っていたことは，帰国の挨拶の中で教皇と交わした会話にもうかがわれる。

教皇がギラルドゥスの奮闘をたたえながら，自分は今回の審議でできる限りのことをしたつもりであると述べたのに対して，ギラルドゥスは次のように答えている。

（4－4）私は神が私の意図を正しく判定してくださるよう願っています。「私が神と私の教会に対する熱い思いから，ただそれだけのためにこの仕事を続けてきたことは」，司教就任の望みが断たれても私がセント・デイヴィズ教会の大司教座権復興のために努力を続けていることから明らかでしょう。神は必ず報いてくださるはずで，私はそれで充分満足です[71]。

ギラルドゥスが教皇に向かってこのように激しい言葉を返すことはこれまでなかった。もはや教皇を頼りにしないという発言である。彼が最後まで保持していた後ろ盾，教皇に対する信頼が完全に崩れている。

1203年夏にギラルドゥスはローマを離れ，苦労して帰国した。ローマ滞在中に重ねた借金の返済や英仏間の戦争勃発など問題が山積していて，帰国は大きく遅延した。教皇も彼が無事に帰国できるか心配したほどである。

その間，セント・デイヴィズ教会は新しい司教候補選出作業を進め，王宮に提出する候補リストをまとめていた。帰国してこれを知ったギラルドゥスは，参事会員である自分が参加していないからリストは無効であると主張したが，無視された。大司教は受け取ったリストを拒否し，自分の侍医であるジョフレイ・オヴ・ヘンロウ（Geoffrey of Henlow）を含む候補リストを再提出するよう要求した。「問題」が終わったからであろう，教会メンバーの意向に配慮するそぶりすら見せていない。教会は異論を唱えることもなく従い，次期司教はジョフレイに決まった。

他方，大司教はギラルドゥスにも働きかけ，ブレコン大助祭の職を辞し，以後セント・デイヴィズ教会の大司教座権について一切発言しないと誓えば，王が出した「王国の敵」という汚名を解いてやると提案した。万策尽きていた彼はこれを受け入れるほかなかった[72]。

この時の思いを彼は次のように記している。

（4－5）私は，いろいろ考え他人にも相談したうえで，大司教の生存中は教皇へ再度訴えを起こすのは危険であるという意見に従うことにした。それは，「［自分が］教会で孤立していて，［しかも］ローマ教皇庁がどのようなところか経験で学び知っていたからである[73]。」

この文章から彼が事態を正確に理解していたことが分かる。「問題」を構想し，提起し

た時に彼が信頼し，頼りとしていたセント・デイヴィズ教会メンバーとローマ教皇の支援を失って，彼に戦う力はもはや残されていなかった。彼の完敗であり，セント・デイヴィズ教会の敗北でもあった。以後教会が大司教座権を主張することはなくなったからである。

V　おわりに

本稿はギラルドゥスをテーマとした14番目の拙稿であり，今回で終わりにしたいと考えている。そこで，本節では14の拙稿を振り返り，残された問題を確認しておこう。

探索の出発は，なぜ彼が『ウェールズ案内』第2巻でウェールズ人・社会をあきらかに誇大とわかるほど酷評し，しかも，その末尾で矛盾含みの提案をしているのかという素朴な疑問であった(74)。末尾の3章で，彼は一方でイングランド王のためにウェールズ人を征服し，統治する戦略を記し，他方でウェールズ人支配者に対してウェールズ人が政治的独立を回復し，維持する方法を説いている。

この疑問を解くために私はまず彼の出自とその政治的背景，成人後の活動とその場であった南ウェールズの状況などについて探索したが，はかばかしい成果は得られなかった(75)。イングランド王とウェールズ人勢力が対峙し，戦闘が繰り返されていた南ウェールズでは，どちらか一方に加担する主張は盛んに行われても，双方を声援することは難しいという当然のことが判明しただけである。

そこで，私は疑問を解く鍵がギラルドゥス個人の思考方法や判断基準に潜んでいるのではないかと考えて，彼の生涯を追ってみることにした(76)。彼は自分の行動について多くの記述を残しているので史料状況は恵まれていると言ってよい。

まず彼の業績を順次追ってみると，生涯が8つの時期に分かれ，各時期の活動内容が大きく違っていることが分かった。すなわち，①南西ウェールズで養育された時期，②グロスターやパリで教育を受けた時期，③セント・デイヴィズ教会で教会改革に尽力していた時期，④司教に昇進できず，再度パリで研究に集中した時期，⑤王宮司祭に抜擢されて，ヘンリ二世のウェールズ政策を支えた時期，⑥セント・デイヴィズ教会へ戻り，著述しながら「セント・デイヴィズ問題」の構想を練っていた時期，⑦「問題」をローマ教皇に提起し，カンタベリー大司教と論争した時期，⑧論争に敗れ，失意のうちに過ごした最晩年，である。

ここで注意したいのは，彼が時期ごとに中心的活動を変えていることである。彼は多くの仕事と取組み，次の仕事のために何度も新しい構想を立てている。そうできるだけのエ

ネルギーと才能に恵まれた人物であった。また，活動期である③から⑧を通じて，彼は状況をよく読んで行動し，さらに，身近な人が理屈に合わない言動をすれば，その矛盾を鋭く批判している。

こうした人物がなぜ『ウェールズ案内』で事実に反するような，また，矛盾含を含んだ記述をしているのか。彼の生涯を追い，大まかな人物像を描いてみても，出発点である私の疑問は解けず，むしろ深まった。

そこで次はギラルドゥスの思考を検討することにした(77)。手がかりは，彼がいろいろな事件に遭遇した際書き残している感想や批判である。こうした記述を使って改めて彼の生涯を追ってみると，私の推測を含んでではあるが，彼が各時期にどのような目的を持ち，どのような判断基準を踏まえて行動していたかが分かってきた。思考のつながりとしてのギラルドゥス像が浮かび上がってきた。

このギラルドゥス像は生涯を通じて見られる要素と時期によって変化するものとに分けて説明するのが便宜である。

前者で際立っているのは彼の生涯目標，すなわち，セント・デイヴィズ教会を司教（ないし大司教）となって改革し，かつての栄光を取り戻したいという願望であり，その実現のために彼は自分が持つ次のメリットを活用しようとした。すなわち，アングロ・ノルマン貴族とウェールズ王家の血統を併せ持つ出自の二元性，南ウェールズにおける征服者・支配者としての権力と地位，故郷，特にセント・デイヴィズ教会に対する愛着，生来の文才と修得した新しい学問，ローマ教皇に対する崇敬の念，である。ただし，当然のことながら，すべてのメリットをいつも同じように利用したのではなく，時期ごとに設定した目標に応じて比重を自在に変えている。

時期ごとの変化が目立つのは，目標達成のために利用している後ろ盾，および，その支援を得やすくするために彼が採っている政治的スタンスである。

まず彼が利用した後ろ盾を列挙すると，親族であるアングロ・ノルマン貴族（「ジェラルド一族」），イングランド王，特にヘンリ二世，代々のカンタベリー大司教，セント・デイヴィズ教会のメンバー，ローマ教皇インノケンティウス三世である。なお，南部のウェールズ人支配者たちは，その名が挙げられることはあっても，彼を強力に支えることはなかった。

次に政治的スタンスについて言えば，イングランド王権とウェールズ人勢力とが対峙する中で出自の二元性を持ったギラルドゥスが活動するのであるから，周囲の人々はいつも彼のスタンスに注目していたはずである。彼自身も慎重にその時々の状況に応じた態度を表明している。これは，彼のように複雑な条件を持つ者にとって必須の配慮である。

ただし，ここで私が指摘したいのは，彼が自分の出自に根差した，その意味で自然なス

タンスのほかに，後ろ盾の意向や利益に配慮して打ち出したスタンスも時として採っているという点である。この他人指向のスタンスがはっきり見られたのは王教司祭を務めていた時期で，彼は王宮の人々の意向に合わせて，自分をウェールズ人と認識しているような表現を繰り返し使っている。くわえて，「問題」を提起した後に彼がウェールズ人の味方を標榜しながら支援を求めているのもこの作戦的なスタンスである。

以上のように拙稿を整理してみると，そこにいくつか欠落部分のあることが分かる。全体としてまだ仮説の域を出ないことは別として，描かれたギラルドゥス像ないし彼の生涯にまだ不明な個所がいくつか残っている。今後の課題として最も重要と思われる点を２つ挙げておこう。

第１に，ギラルドゥスがひとつの時期から次へと移行する際に，新しい構想をどのようにして作り上げたのか，その思考の過程が充分に解明されていない。ただし，転換が自然に理解できる場合もある。例えば，上記の①から②，②から③への転換は，彼がその時に持っていた条件から考えて当然であろう。⑦から⑧も選択の余地はない。問題は④から⑤，および，⑥から⑦への転換である。いずれも彼が決断して行った飛躍であり，後者は冒険と言ってもよいほど大きなリスクを含んでいた。先行拙稿で繰り返し述べたことであるが，少し説明しよう。

王宮付き司祭になった事情をギラルドゥスはヘンリ二世から強く要請されたからと説明し，自分は研究と著述に専念したかったと述べている。しかし，私は，彼がこの地位と職務をセント・デイヴィズ司教就任という目標を達成するために利用するつもりであったと考えている。すなわち，実践によって王に自分が有能かつ忠実な家臣であることを示し，自分がウェールズ人支配者たちと結託するのではないかという王の危惧を払拭しようとした，と推定している。王宮付き司祭の職はこの当時イングランド王宮で司教昇進のステップと目されていたから，私の推定は決して無理なものではない。しかし，ギラルドゥスはそうした記述を残しておらず，確認できないまま残されている。

また，彼は就任に際して，王の自分に対する危惧がどれほど根深いものと予測していたのか，逆に言えば，王が簡単に自分の評価を変えてくれると本当に考えていたのか分かっていない。結果だけで判断するとギラルドゥスの思い込みによるひとり相撲のようにも見えるが，彼はそれほど単純な人間だったのか。まだ検討の余地がある。

「問題」提起に関して残されている疑問は上記よりも大きい。まず，「問題」の構想・提起について，ギラルドゥスは教会の主要メンバーから呼びかけられ，これを自分は気が進まぬまま受け入れたのだという書き方をしているが，事実は逆で，終始彼が主導していたことは本稿から明らかである。彼が提起前の数年間じっくりと構想を練っていたことは間違いなく，その際彼は後ろ盾とするローマ教皇とセント・デイヴィズ教会を説得する論理

について熟考し，さらに，彼らをどこまで信頼できるか慎重に検討したはずである。しかし，「問題」が提起されると，間もなく彼の期待は次々と裏切られ，最後は無残な敗北に終わっている。彼はこの結果について，論敵であるカンタベリー大司教が偽証や賄賂といった卑劣な手段を繰り返し使い，その結果後ろ盾になるはずの人々が皆変節したからだと述べている。

こうした事実があったことは間違いない。しかし，事前の検討を視野に入れてみると，金品になびき，強力な権力に屈する事例はこの当時決して稀ではなく，彼もよく知っていたはずである。なぜ彼は当初よりこうしたリスクを考慮しなかったのだろうか。次々と後ろ盾の人々が変節するのに驚き，非難し，後になって後悔しているギラルドゥスの姿は，生涯をかけた冒険に乗り出した人物にそぐわない。彼はもっと慎重で目配りのできる人物だったと思われるが，もしそうならば，何が彼の軽信を生み出したのか。この点も今後に残された課題である。

第2は本節の冒頭で取り上げた点，すなわち，ギラルドゥスがなぜ『ウェールズ案内』第2巻でウェールズ人・社会を酷評し，末尾で矛盾含みの提案をしているのかという問題である。同書は2度彼自身によって改訂されているが，それでもこの部分は残されている。また，彼は他人の矛盾を鋭く指摘する能力を持っていたから，自分の矛盾含みの記述に気づかなかったとは考えにくい。ギラルドゥスが自分も部分的に属していたウェールズ人・社会について根源的にどのように考えていたのか，感じていたのか，さらに検討が必要である。問題の記述が彼のウェールズ人・社会の認識の中で極端に過酷であることから推測すると，何か特殊な状況下で，感情に任せて書いた可能性もある(78)。

いずれにせよ，『ウェールズ案内』第2巻の記述を12世紀後半のウェールズを探る史料として利用する際は充分注意する必要がある。

註

第1節

(1)［41］永井，第1節，第4～第9節。

(2)イングランド王権とウェールズの司教座教会との間で次のルールが出来上がっていた。①教会が司教候補を数名王宮に推挙する。②王がこの中から司教を選定する。③それをカンタベリー大司教が聖別する。

(3)［10］Giraldus.

(4)［41］永井。

(5)［41］永井，第5節。

(6)［18］Giraldus.

(7)［5］Giraldus.

(8)［30］Bartlett，p. 219.［28］Giraldus（Rutherford，A.（ed.，trans.）），pp. 107～10.
残されている目次については，［5］Giraldus，pp. 3～18.

(9)［10］Giraldus，pp. 101～116.
(10)［10］Giraldus，pp. 117～18.
(11)［10］Giraldus，p. 1.
(12)［10］Giraldus，p. 119.
(13)「ギラルドゥス」や「彼」ではなく，「私」のこととして記されている箇所が少数ある。筆の滑りであろう。
(14)［10］Giraldus，pp. 327～29. Miseri Menevensis.
(15)［30］Bartlett，p. 219.
(16)［30］Bartlett，p. 219.
(17)［36］Rooney.
(18)［10］Giraldus，p. xxxviii.
　なお，この校訂本は2つのタイトルページをもち，そのひとつではDe Menevensi Ecclesia Dialogus（「セント・デイヴィヅ教会をめぐる対話」）という名称になっている。この別称は第一部が問答形式で書かれていることに由来する。
(19)［29］Giraldus（Butler，H. E.（ed.，trans.））.
(20)［5］Giraldus，［7］Giraldus，［8］Girrldus，［9］Giraldus，［10］Giraldus，［18］Giraldus.
　ここには『アイルランド征服（Expugnatio Hibernica）』と『ウェールズ旅行記（Itinerarium Kambriae）』は含まれていない。両書にはギラルドゥスの活動が多く記されているのだが，あまりに多く，すべてを抜き出すのは困難と判断したのであろう。この時期の活動は，大幅に圧縮された『自叙伝』からの引用で済ましている。
(21)［41］永井。
(22)［37］永井。
(23)［43］永井。
(24)［46］永井。
(25)［48］永井。
(26)［49］永井。

第2節
(27)ギラルドゥスは教会のメンバーが「問題」を構想し，彼に司教となるように要請したと記しているが，これは一種のジェスチュアである。この点は次節以降に紹介する「問題」の展開からも明らかである。また，この当時のセント・デイヴィズ教会には，彼以外に西ヨーロッパ聖界の状況を踏まえて大胆な構想を作ることのできる人はいなかった。
(28)ウォルターは王の権益を拡大することに尽力しており，その一環として王国内にカンタベリー大司教を頂点とする聖界ヒエラルキーを構築しようとしていた。したがって，王国内に自分と同等の権限を持つ可能性のある大司教座ができることはぜひとも阻止したかった。また，ウォルターの側近がギラルドゥスから厳しく批判されたことがあり，これをきっかけにギラルドゥスに対し強い敵意を持っていた。［5］Giraldus，pp. 95～96.［28］Giraldus（Rutherford（ed.，trans.）），p. 77.
(29)［5］Giraldus，p. 165.［29］Giraldus（Butler（ed.，trans.）），pp. 182～83.
(30)［10］Giraldus，pp. 168～69.［29］Giraldus（Butler（ed.，trans.）），p. 186.
　Quod si probari poterunt ea quae proponitis，satis erit in expedito jus quod petitis.
(31)［49］永井，第5節。
(32)［41］永井，第7節。
(33)［10］Giraldus，pp. 176～77.［29］Giraldus（Butler（ed.，trans.）），pp. 189～90.

・・・・・aliud proculdubio facturi sumus.

Putabant igitur omnes haec audientes in proximo futurum archidiaconi promotionem.

(34)［10］Giraldus, p. 177.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 190～91.

・・・・・ecclesiam Menevensem quae adeo in tam barbara et hastili terra bono indigebat gurbernaculo Giraldo conferret.

(35)［10］Giraldus, p. 178.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 191.

(36)［10］Giraldus, pp. 178～79.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 191.

・・・・・adeo ut grandis pecuniae summd papae・・・・・proveniret.

Mutatum est itaque curiae consilium・・・・・

(37)［10］Giraldus, pp. 179～80.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 192～94.

(38)［10］Giraldus, pp. 181～82.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 194～95.

nomine archiepiscopi.

Quod audiens Giraldus ad papae pedes mox humiliter se prostravit, et osculum eis dedit, dicens, quod verbrum propheticum per Dei gratiam et suam hoc erat et esse debuerat・・・・・

(39)［10］Giraldus, p. 179.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 192.

(40)［10］Giraldus, p. 186.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 200.

第3節

(41)［10］Giraldus, pp. 188～89.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 203～204.

(42)［10］Giraldus, pp. 194～95.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 219.

(43)［10］Giraldus, pp. 195～96.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 216.［47］永井，第7節。

(44)［10］Giraldus, p. 226.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 249.

ギラルドゥスはウェールズ人支配者たちへの手紙の中で，約束の金品を送ってくれるよう求めている。

(45)［10］Giraldus, p. 209.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 234.

Dico longe melius et laudabilius electo fore jura S. Davidis, ne nimio silentio deperirent, contra tantos adversarios et Angliam totam vidicasse, quamvis tamen evincere non possit.

(46)［10］Giraldus, p. 196.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 221.

(47)［10］Giraldus, pp. 196～97.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 221～22

(48)［10］Giraldus, p. 211.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 236.

(49)［10］Giraldus, p. 215.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 239.

(50)［10］Giraldus, p. 203.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 227～28.

(51)［10］Giraldus, p. 215.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 239～40.

(52)［10］Giraldus, p. 217.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 242.

(53)［10］Giraldus, p. 220.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 244.

(54)［10］Giraldus, p. 222.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), p. 246.

Quaerenti autem Eliensi episcopo, quare invitis beneficium dare et ingratos a servitude ac subjection eripere・・・・・

Possum enim servum meun emancipare et captivium a carcere liberare vel invitum.

(55)［10］Giraldus, p. 222.［29］Giraldus (Butler (ed., trans.)), pp. 246～47.

Mirandum valde corruptionis hujus effectum; quod canonic; Walenses, qui originali gaudebant libertatis honnore, sicut et gens sua tota, a servitude et subjection, qua tenentur eripi recusant, vel etiam ab extraneo・・・・・

(56)［4］Giraldus，p. 213.［27］Giraldus（Thorpe（trans.））, pp. 262～63.

彼は『ウェールズ案内』第1巻の末尾で，よい指導者がいればウェールズの教会ははるかに良くなるはずだと言っている。［4］Giraldus，p. 204.［27］Giraldus（Thorpe（trans.））, p. 254.

(57)［10］Giraldus，pp. 227～28.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, pp. 253～54.

(58)［10］Giraldus，p. 234.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 259.

(59)［10］Giraldus，p. 235.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 260.

第4節

(60)［10］Giraldus，p. 242.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 267.

(61)［10］Giraldus，pp. 255～56.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, pp. 284～85.

(62)［10］Giraldus，p. 257.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 286.

(63)［10］Giraldus，p. 265.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, pp. 294～95.

(64)［10］Giraldus，p. 265.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 295.

Archidiaconus autem, heu! credulus nimis, utpote tantae corruptionis prorsus adhuc ignarus・・・・・

Nec vos timere oportet quod unquam vobis in jure vestro deesse velimus.

(65)［10］Giraldus，p. 265.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 295.

Archidiaconus autem, cui male fuerat persuasum, curiae fallaci credulus nimis effctus・・・・・

(66)［10］Giraldus，pp. 267～68.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, pp. 297～98.

(67)［10］Giraldus，p. 268.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 298.

・・・・・his enim verbis ipsis ad colorandum factum suum usus est papa.

(68)［10］Giraldus，p. 269.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 299.

(69)［10］Giraldus，p. 268.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 298.

・・・・・qualiter sententiam hanc ex toto fundavit et formavit e mendacio per partis astutiam adversae conficto・・・・・ubi nil veritatis omnino, sed conficta et falsa cuncta fuerunt.

(70)［10］Giraldus，p. 270.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 301.

(71)［10］Giraldus，p. 272.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 302.

Quod vero zelo Dei solum et ecclesiae nostrae laborem hunc assumpserim・・・・・

(72)［38］Richter，pp. 123～24，133～35.

(73)［10］Giraldus，p. 324.［29］Giraldus（Butler（ed., trans.））, p. 347.

・・・・・quia nec ecclesia sua cum ipso stabat, nec curiae Romanae, sicut expertus jam fuerat・・・・・

第5節

(74)［37］永井。

(75)［38］永井，［39］永井。

(76)［40］永井，［41］永井，［42］永井。

(77)［43］永井，［44］永井，［45］永井，［46］永井，［47］永井，［48］永井。

(78)ギラルドゥスのウェールズ人に対する評価が最も低下したのは「問題」が敗北に終わった後である。この時期であれば『ウェールズ案内』第2巻のように彼らを酷評することもありうる。しかし，同書の第1版は「問題」提起以前に仕上がっていたから，この推測は成り立たない。ただ，最近彼が自分用の写本を手元に置いていたことが分かってきたので，同書の完成後に彼が加筆し，それを今日彼の

第1版と考えている可能性がある。

参照文献

Ⅰ　史料

（A）ギラルドゥスの著作と訳本

[1] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambernsis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867)（『アイルランド地誌』）

[2] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James F. (ed.):*Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867)（『アイルランド征服』）

[3] Giraldus Cambrensis: Itinerarium Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868)（『ウェールズ旅行記』）

[4] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868)（『ウェールズ案内』）

[5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.)（『自叙伝』）

[6] Giraldus Cambrensis: Gemma Ecclesiastica (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862)（『教会の宝石』）

[7] Giraldus Cambrensis: De Principis Instructione (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891)（『君主の訓育』）

[8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)（『抜粋文集』）

[9] Giraldus Cambrensis: Speculum Ecclesiae (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873)（『教会の鑑』）

[10] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863)（『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』）

[11] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.)（『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』）

[12] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.)（『ヨーク大司教ジョフレイ伝』）

[13] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Ethelberti (in [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum)（『聖エセルベルトウス伝』）

[14] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Remigii (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[15] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Hugonis (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)

[16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica*, *The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978.（『アイルランド征服』）

[17] Giraldus Cambrensis (Bartlett, Robert (ed., trans.)): *Instruction for a Ruler*, *De Principis Instructione*, Clarendon press, 2018.（『君主の訓育』）

[18] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920.（『論駁』）

[19] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
[20] Giraldus Cambrensis: Topography of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
[21] Gerald of Wales, (O' Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
[22] ギラルドゥス・カンブレンシス, (有光秀一訳):『アイルランド地誌』, 青土社, 1996 年。
[23] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
[24] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
[25] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*), Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)
[26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
[27] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*) Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
[28] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145～1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)
[29] Giraldus Cambrensis (Butler, H. E. (ed., trans.)): *The Autobiography of Gerald of Wales*, The Boydell Press, 2005, (orig. 1937)

Ⅱ 研究文献（本稿で参照したもの）

[30] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146～1223*, Clarendon Press, 1982.
[31] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydel Press, 2007.
[32] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David' s Cathedral. (in [31])
[33] Henley, George & McMullen, A. Joseph (eds.): *Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic*, University of Wales Press, 2018.
[34] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Welsh Past. (in [33])
[35] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
[36] Rooney, Catherine: The Early Manuscripts of Gerald of Wales. (in [33])

Ⅲ 拙稿（本稿に関連するもの）

[37] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレンシスの二元性」,『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号, 2009 年。
[38] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界（Ⅰ), (Ⅱ)」,『国学院経済学』第 59 巻 1 号, 2010 年, 第 59 巻 2 号, 2011 年。

[39] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの自己認識とウェールズ評価（Ⅰ），（Ⅱ）」，『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号，2011 年，第 60 巻 2 号，2012 年。
[40] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリア・デザイン（Ⅰ），（Ⅱ）」，『国学院経済学』第 62 巻 2 号，2014 年。第 62 巻 3 号，2014 年。
[41] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスとセント・デイヴィズ問題（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）」，『国学院経済学』第 63 巻 1 号，2014 年，第 63 巻 3・4 号，2015 年，第 64 巻 1 号，2015 年。
[42] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』（Ⅰ），（Ⅱ）」，『国学院経済学』第 64 巻 2 号，2015 年，第 64 巻 3 号，2016 年。
[43] 永井一郎「『ウェールズ案内』を読み直す－著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに（Ⅰ），（Ⅱ）」，『国学院経済学』第 65 巻 1 号，2016 年，第 65 巻 2 号，2017 年。
[44] 永井一郎「『アイルランド地誌』を読む－ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて」，『国学院経済学』第 66 巻 2 号，2017 年。
[45] 永井一郎「『アイルランド征服』を読む－ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図とかかわらせて（Ⅰ），（Ⅱ）」，『国学院経済学』第 67 巻 1 号，2018 年，2 号，2019 年。
[46] 永井一郎「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス」，『国学院経済学』第 68 巻 1 号，2019 年。
[47] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスの帰属意識」，『国学院経済学』第 69 巻 1 号，2020 年。
[48] 永井一郎「『君主の訓育』第 1 巻を読む－1190 年代前半のギラルドゥス・カンブレンシス」，『国学院大学経済学』第 69 巻 2 号，2021 年。
[49] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレンシスと『大司教座セント・デイヴィズ教会』」，『国学院大学経済学』第 70 巻 1 号，2021 年。